令和２年度

板橋区総合教育会議

令和２年９月３日

板橋区　総務課

令和２年度板橋区総合教育会議

日　　時　　令和２年９月３日（木）
開　　会　　午前１０時３０分
閉　　会　　午後０時２０分
場　　所　　板橋区役所南館６階 教育支援センター

出 席 者

区 長	坂本 健
教育長	中川 修一
教育長職務代理者	高野 佐紀子
教 育 委 員	青木 義男
教 育 委 員	松澤 智昭
教 育 委 員	長沼 豊

出席した事務局職員

政策経営部長	有馬 潤
政策企画課長	吉田 有
経営改革推進課長	三浦 康之
財政課長	杉山 達史
ＩＴ推進課長	関根 昭広
総務部長	尾科 善彦
総務課長	篠田 聡
保健所長	鈴木 眞美
予防対策課長	高橋 愛貴
教育委員会事務局次長	藤田 浩二郎
地域教育力担当部長	湯本 隆
教育総務課長	近藤 直樹
学務課長	星野 邦彦
指導室長	門野 吉保
教育支援センター所長	平沢 安正
上板橋第四小学校長	氣田 眞由美
板橋第三中学校長	武田 幸雄

議 題 等

１　開　　会
２　区長挨拶
３　議　　題
　感染症対策を契機とするこれからの学校教育の在り方について
　　－新しい学校生活様式に向けて－
（１）プレゼンテーション
　①「板橋区立幼稚園・小中学校感染症予防ガイドライン」について
　②「教育の板橋　イノベーション2020」の実現に向けて
　③「次世代型学習支援プロジェクト」の取組と課題
（２）協議
４　閉　　会

○坂本区長

皆様おはようございます。時間前でございますけれども、全員おそろいでございますので、ただいまから板橋区総合教育会議を開催したいと思っております。

まず、中川教育長、また教育委員の皆様には、日頃から板橋区の教育の伸長発展にご尽力を賜り、誠にありがとうございます。

この「総合教育会議」につきましては、「地方教育行政の組織及び運営に関する法律」によりまして、地方公共団体の長と教育委員会が教育行政について協議・調整を行い、両者が教育施策の方向性を共有するなど、連携体制の強化を図るために設けられている会議でございます。新型コロナウイルス感染症の影響下における教育条件の整備につきましても、予算の編成・執行権限、また条例の提案権を有する首長と教育委員会が総合教育会議において調整・協議する事項に当たるものでもあります。

本日の議題は、「感染症対策を契機とするこれからの学校教育のあり方について」でありますけれども、現状、現況を踏まえて、少し私の方からお話を申し上げたいと思います。

まず、私が”東京で一番住みたくなるまち板橋宣言”の中で掲げておりますテーマの一つであります、若い世代に選ばれる魅力あるまちづくりについては、魅力ある教育を推進することによって、すべての児童・生徒の学力向上を目指していきたいという考えが込められております。

ご承知のとおり、新型コロナウイルス感染症の影響によりまして、本区におきましても、3月2日から5月末まで、約3ヶ月にわたりまして、区立学校・幼稚園の臨時休業をいたしました。この間、教育委員会におきましては、中学3年生全員にタブレットを貸与し、動画の作成・配信と、これと連動した学習課題の配付によって、家庭学習の支援等を行って参りました。6月から学校を再開しておりますけれども、新型コロナウイルス感染症につきましては、長期的な対応が必要であることが見込まれておりまして、教育現場においても、持続的に児童生徒等の教育を受ける権利を保障していくため、学校における感染及びその拡大リスクを可能な限り低減した上で、学校運営を継続していく必要があると考えております。

本日の会議におきましては、「感染症対策のための学校での新たな生活様式のあり方」、ＩＣＴを活用した今後の教育活動についてを協議をいただきたいと考えています。

教育委員の皆さんからは、それぞれの立場から、様々な観点での教育行政の発展に資するご意見を頂戴したいと考えています。まず協議に入る前に、「板橋区立幼稚園・小中学校感染症予防ガイドライン」について、事務局から、また、学校における実際の感染症対策とＩＣＴを活用した教育活動の実践例についてを、上板橋第四小学校氣田校長先生、そして板橋第三中学校武田校長先生から、順に説明をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○星野学務課長

ただいま、ご紹介をいただきました、教育委員会事務局学務課長の星野でございます。

本日の説明につきましては、お手元の「板橋区立幼稚園・小中学校感染症予防ガイドライン（新型コロナウイルス感染症）」及び「板橋区立小・中学校幼稚園における新型コロナウイルス感染症への対応について」という１枚のペーパーがございますが、こちらを使わせていただきます。

まず、最初に、ガイドラインを２枚おめくりいただきまして、3ページをご覧ください。学校運営編といたしまして、感染症予防策の徹底を記載してございます。こちらは、文字どおりウイルスによる感染症でございますので、ウイルスを学校に持ち込まない、また学校内で人から人にうつさない、ということが非常に重要でございます。こういった観点から、児童生徒に対し、手洗い、また咳エチケット、マスクの着用の励行を徹底しております。一方、昨今、非常に気温が高い状態が続いておりますので、気温が高い日には熱中症などの被害が発生する恐れがございます。身体的距離（おおむね２ｍ以上）に配慮しながらマスクを外すことも記載してございます。熱中症は命に関わりますので、ここについてよく認識をいただき、こちらへの対応を優先させるということとしております。

また、児童生徒、教職員を含めまして、日頃から毎朝自宅で検温をして、みずからの平熱を確認するということ、また平熱より高い場合、風邪症状などが見られる場合には登校を控えることを記載しております。また、通学時には会話を控えるなど、飛沫感染の予防についても言及しています。4ページには、校内環境として、校内に石鹸や消毒アルコール等を設置するなど、手指衛生を保つということ、また、適切な環境保持のため、教室のドアや窓を休憩時間等に開けて、換気をすることなどについて記載をしております。また、同じページでございますが、教育活動上の留意点として、授業時間、学習指導についても詳細を記載しておるところでございます。今年度につきましては、特に学校行事、7ページのほうに記載しておりますが、宿泊行事や連合行事等につきましては、感染症予防の観点から、大変残念ではございますが、中止をしているところでございます。

また、説明が前後いたしましたが、（7）では、部活動について記載しておりまして、活動時間の短縮や内容の検討などを含めて、様々学校にもご対応いただいているところでございます。続いて、少し飛びますが、このような対策を行ったとしても、やはり感染症というのは防ぐことが難しいところでございます。たいへん残念ではございますが、区の中の学校あいキッズを含めまして、今まで19名ほど感染者が発生しております。ただ、学校内で人から人に移ったというケースはございません。今のところ、児童生徒で15例、教職員で2例、その他で2例ということになっております。濃厚接触者は発生しておりますが、いずれも陰性というこ

とでございました。続きまして、もう１枚のペーパーの方をご覧いただきたいと思います。感染症の対応についてです。こちらは保護者の方にお配りしているものですが、お子様ご家族の体調不良時にあってですね、感染が疑われる場合などは学校をお休みいただくということをお願いし、そして、項番２には、児童生徒、教職員の感染が判明した場合の対応といたしまして、感染者は出席停止、自宅待機となりますが、感染者が感染可能期間に学校に登校していない場合には、授業は平常どおり行われること、万が一登校していた場合には、学校が開かれていれば直ちに下校していただき、自宅待機としていただく。とはいいましても、小学生の方たちを急にお家に帰すというのは、安全上の問題もございますので、この場合は対応ができるまでの間、所定時間をあいキッズも含めてお預かりをすること、また、休校期間については７日間の臨時休業とすること、あいキッズについても同じ期間をお休みとすること、その間に校内消毒、また濃厚接触者の特定という作業を行うことを記載しまして、保護者の方にご確認をいただいております。

また、同じペーパーの裏面になりますが、感染者に対する偏見や差別等の防止ということも重ねてお願いしているところでございます。元の冊子のほうに戻らせていただきますが、14ページをご覧ください。こちらは臨時休業編の項番４となりますが、学習機会の保障について記載をさせていただいております。感染者、濃厚接触者が確認された場合には、各授業終了後の板書、児童生徒のノートの画像の記録であるとか、学校・学年が臨時休業になった場合には、４月からの臨時休業期間と同じように、学習プログラムや家庭でできる教材を作成し、ホームページにアップロードすることなどですね、具体的な対策について記載をしております。

時間の関係で、すべてをご紹介できませんが、私の説明は以上でございます。ありがとうございました。

○上板橋第四小　氣田校長

上板橋第四小学校校長の氣田でございます。本日はどうぞよろしくお願いいたします。

私からは休校の学習支援、学校再開、これからの子どもの学び、の以上大きく３点についてお話をさせていただきます。

まず１点目の学習支援についてです。本校では、日常的にメールとホームページのブログを併用しての発信を行って参りましたので、直後からの課題の発信を始めました。また、指導室にユーチューブの活用を認めていただきましたので、教員による学習動画の制作と配信、校長によるメッセージ動画配信を開始いたしました。卒業式は時間や内容を削減し、実施いたしました。小学校の卒業式は、門出の言葉と称した呼びかけをします。儀式的行事のねらいは、厳粛な場における、マナーや行動の仕方などを身に付けることです。しかし実際には、門出の言

葉の練習にかなりの時間を割いています。今回本校ではその部分を削除し、中学校の答辞にならい、卒業生代表児童による言葉に変えました。ご来賓の参加、ご挨拶もありませんでしたので、校長の式辞、証書授与、代表の言葉のみというたいへんシンプルな内容で、40分程度で終了いたしました。6年生の態度や行動そのものが中学校への希望や意欲を感じるもので、儀式的行事のねらいは達成できたと思います。次に休校が延長した学習支援の第2段階では、改めて、新たに「かみよんチャンネル」を開設し、日直の教員による朝の会の動画配信を開始しました。これは、学校からの一方通行ですので、家庭での様子は教員が各家庭に電話連絡をし、把握をいたしました。さらに、学習支援の第3段階に入り、詳細な家庭学習の時間割とそれに合わせた家庭学習のヒント動画を配信し、教科書を活用しての家庭学習に取り組ませました。私から教員に、学校が再開した時に役立つような課題を工夫して欲しいということを伝えました。例えば国語科では、教科書を音読して感想を書く。好きな場面を視写して、その理由を書く。社会科や理科では、教科書や資料をじっくり見て、調べてみたいことにサイドラインを引く、これらの学習に取り組みました。このことは、板橋区の施策である「読み解く力」にも繋がることですし、この学習の仕方は反転学習にも近い形かと思います。これらによって、学校再開後の授業をスムーズにし、学習に対しての意欲の喚起や、見通しを持たせることに繋がりました。しかしながら、オンデマンド型としては工夫ができたものの、双方向型のオンライン授業の壁とその必要性を感じたところでございます。次に、動画配信と並行し、新たな支援を開始いたしました。しかし本校では、大変希望者が少なく、ご覧のような保護者からの声もいただきました。ここでは、家庭の状況に応じ、個別に児童を呼び、じっくり個別指導ができたことは有効でした。続いての新たな学習支援の第2段階でも若干の増加は見られたものの、参加人数はあまり多くはありませんでした。

次に2点目の学校の再開についてです。本校は第6学年が1学級38人で、半分の20人弱での学習は、担任が指導するのに、ちょうどよい適正な規模だと感じました。4学年に精神的な不安による不登校児童がいたのですが、この再開直後の分散登校で、少人数のおかげからか不安が軽減されたようで、学校復帰ができました。また、家庭学習での予習の効果が大きく、授業では学校だからこそできる共有の時間を大事にし、重点化を図りました。さらに、子どもたちは学校の授業と家庭学習を1日おきに、交互に取り組みをしましたので、その両輪で学習を進められたことが大変効果的で今後の学びのスタイルのヒントになるのではないかと考えています。

一方で、当初苦労したのは給食です。当然物の共有ができませんので、児童に配膳はさせず、お弁当形式での提供ができないかと思いましたが、板橋区ではその形態は取れないということでした。栄養士が教員1人で配膳できる簡単メニュー、献立を考え、フェイスシールドを着用

し対応いたしました。牛乳パックを洗い干す作業などは、1学期は見合わせ、2学期以降に始めています。ここでの苦労は、低学年の指導です。委託の調理業者から配膳の手伝いの申し出もいただきましたが、区との契約にはないのでお断りをいたしました。また、ＣＳ委員会を通じて、給食ボランティアの申し出もありましたが、外部の人を入れることはできないため、お断りをし、本校では副担任として学年に配置している専科教員や学力向上専門員のほか、校内の人員総動員で給食指導に入りました。それ以後、白衣の共有を避け、各自、エプロン、マスク、手袋を着用して、児童にも配膳の役割を一部担ってもらっています。また、食べるときに、マスクを外すということが最大のリスクですので、前向きで一言も発することなく食べる状態は、現在も継続しています。

1学期は委員会活動も中止でしたので、昼の放送では音楽専科が各学年の鑑賞教材の曲をかけたり、図書ボランティアの方が放送での読み聞かせをしてくださったりして、少しでも和やかな雰囲気を出そうと工夫をしています。通常の形での授業が開始し、ご覧の3点について徹底を図りました。教室では十分なソーシャルディスタンスを取ることは、なかなか難しいのが現状です。新しい生活様式については、子どもたちの対応力は我々が思う以上にあります。感染予防策として、毎朝教員が窓を開放、机椅子の消毒作業、用務主事が手すり、ドアノブ等の消毒をしています。子どもの清掃活動は中止していますので、それも担任が行っています。環境面では、ゾーニング、ディスタンステープ、発熱等の症状が見られた児童の待機場所の確保など、校内ででき得る限りの予防策をとっております。毎朝、体温カードをチェックしていますが、パソコンと連動した顔認証による体温測定器等のようなものがあると便利だなというふうに感じています。

7月からはＣＳ委員会を通じて、学校支援地域本部による消毒・清掃ボランティアの方々が、これらの作業を協力してくださっています。消毒作業に布を使用していたのですが、衛生面を考慮してペーパータオルの寄付を町会よりいただき、活用させていただいております。また、ボランティアのある方から、学校は今でも箒と雑巾を使っているのですか、と驚かれ、用務主事用に倉庫に備蓄してあったマイクロファイバークロスを活用しています。作業面からも、効率が上がったとの声が上がっています。

以上のように、改めて板橋区コミュニティスクールの支えを、私はたいへんありがたく思っております。コミュニティスクール委員会を会議体とし、学校支援地域本部を実働部隊とするこの両輪の関係であるｉＣＳ板橋区コミュニティスクールの仕組みは、校長の私にとっては大きな力でありますし、学校の共働経営者として、心強く思っております。

続きまして、新しい生活様式を踏まえての授業についてです。感染症との共存は続くため、感染症予防策の観点は必ず考慮しながらも、これまでやってきた学びを止めてはならないと考

えます。本校では、学び合いを核とし、話し合いやタブレットを活用した発話を中心とした学び合いの実践をしてきました。しかし、コロナ禍において、付せんや思考ツールを活用して、書くことやそれを読むことでの学び合いをしている様子を見て、また違った形での可能性を感じているところでございます。

現在、小学校のタブレットパソコンは、9年生に貸し出されております。これまで本校はプログラミング教育も含めて、授業で日常的に活用してきましたので、教員は、これからの返却を心待ちにしているところです。ただ、他地区から転入してきた教員は電子黒板の存在に感動し、黒板との使い分けをしながら、果敢に積極的に授業の工夫をしています。莫大な予算をかけて、板橋区が入れてくださった電子黒板を一層効果的に活用するとともに、加えて、タブレットの活用は、これからの学びに必須であると考えます。

次に、学校行事を中心とする特別活動についてです。今年度中止となった行事もありますが、これを契機とし、これまで当たり前と思っていたことをねらいや目的に照らし、見直しを図ることが大事だと考えます。各行事を通して育成する資質、能力は何なのかを考えたときに、教師の自己満足になっていないか、子どもが主体となっているかなどを考え、従前のやり方に戻るのではなく、新しい生活様式を踏まえた上で、新たな学校行事の構築に取り組んで参りたいと考えます。例えば、本校の6学年は音楽科の和太鼓と体育科の表現運動をコラボさせ、土曜授業に校庭で発表する予定です。これは、6年児童から音楽会と運動会をミックスしてはいけないのか、音楽会は体育館でないと駄目なのか、という子ども発の声を取り入れたものです。また、私見としまして、1から5学年、6から9学年をまとまりとする小中一貫教育を意識した学校行事が実現できないかと、私はひそかに考えております。

いずれにしてもコロナ前にどう戻すかではなく、これからの新たな形を探っていきたいと考えます。最後に、これからの子どもの学びについてです。コロナ禍により我々の当たり前が一転しました。このことにより、教職員の心身両面の苦労は増しましたが、また一方で、考えるべきところに来ていた課題について、より前向きに意味や価値を見いだすことができたように思います。

私はご覧のような3点を核に、これからの教育活動を推進して参りたいと考えます。1点目は、誰一人も見捨てない、個別最適化の教育です。家庭環境等によって、学びに差があってはならないですし、不登校児童も含め、その子の学びのスタイルに合った教育を保障することが必要であると考えます。

2点目は、子どもたち一人ひとりを自立した学び手にすることです。学びは学校で完結せず、生涯持続することなので、家庭学習においての学びにも力を入れていく必要があると考えます。学校にしかできない、学校だからこそできる学びと、家庭で進めることが可能な学習を両輪と

し、連動させていきたいです。

3点目は、一斉学習、個別学習、協働学習などの多様な学びの形を取り入れることにより、学ぶことが楽しい、と思う子どもにしていきたいと思います。これらを実現するためのツールとして、これも莫大な予算をかけ、現在、区を上げて、そして教育支援センターで着々と整備を進めてくださっているＧＩＧＡスクール構想に、学校、教職員は大変期待をしております。コロナ禍を経て一気に進んだＧＩＧＡスクールですが、来るべき時が来たのかなというふうに私は感じています。休校措置における子どもの学びの質と量の両面の保障のためのみならず、これからの次世代の教育の推進及び教育の板橋イノベーション2020の実現に向けて、このＧＩＧＡスクール構想は、これからの教育や学校のあり方を変える重要なツールであると考えます。

新たな学びを推進していくために、教員の意識改革や授業技術等において課題も多いと思いますが、教育委員会事務局のリーダーシップのもと、学校と教育委員会は、一枚岩となって推進していけるように、私も校長として今後さらに精進して参りたいと思います。以上で私からの説明を終わります。ありがとうございました。

○板橋第三中　武田校長

失礼いたします。板橋第三中学校長武田幸雄と申します。

これより、コロナ禍における臨時休業中の本校の学習支援策とウィズコロナ、アフターコロナを見越して、現在構築を目指している、次世代型学習支援システムについて、ご説明ご報告申し上げます。

本校では、今年度、板橋区教育ビジョン２０２５を受け、学力の定着と向上を喫緊の課題として学校経営方針を立てておりました。しかしながら、コロナ禍による臨時休業が長引いたことにより、最低限の学力保障すら危ぶまれる状況となりました。

そうした状況にあって、まず本校が臨時休業中から現在に至るまで進行形で取り組んでいる支援策について、対象者を生徒、保護者、教職員に分けてご説明いたします。

順番が前後しますが、まず初めに、中央②、保護者に対する取り組みです。臨時休業中の5月、ネットに関する家庭環境調査を、ＷＥＢアンケートフォームを利用して、ネット上で行いました。それを機に、保護者の皆様にも本校が推進しようとしている次世代型学習支援システムについてご理解いただくとともに、オンライン教育に期待している保護者が約85%いることが判明しました。残りの15%の保護者もネット環境さえ整えば期待をするとの考え方だったので、基本的には100%の保護者に待望論があると思われます。また、学校再開後の保護者会や進路説明会もＷｅｂ会議システムを使用して分散開催したので、保護者のイメージも具体的になってきているかと思います。なお、9月19日に予定している小学生の保護者対象の学

校説明会もユーチューブ動画でライブ配信する予定です。

次に右側、③教職員に対する取り組みです。4月当初のユーチューブチャンネルの立ち上げと同時に、次世代型学習支援システムの構築を目的としたプロジェクトチームを発足させました。構成員は、各学年2名ずつの合計6名プラス管理職です。このＰＴが中心となり、在宅勤務者の増えた臨時休業中はＷｅｂ会議アプリを使った職員会議や打ち合わせを行うようになり、学校再開後も職員会議は同様の方法をとっております。また、9月から12月にかけての4ヶ月間は、当初月1回だった土曜授業を2回に増やしました。そして、その増やした土曜授業は、全学年、全教科で双方向型もしくは学習支援動画やアプリを使用した授業にします。厳密に言うと、登校日ではなく、学習支援日になので、授業としてはカウントしません。また、家庭にネット環境の整っていない7、8年生については、学校に登校させ、学校のパソコンを使用して授業を受けます。月に1回、そうした機会を設けることで、次世代型の学習支援システムに教員も生徒も「慣れる」、というのが、この取り組みの大きな目的です。

では、一番肝心な①生徒に対する取り組みをご説明申し上げます。4月早々にユーチューブチャンネルを立ち上げ、これまでに100本以上の学習支援動画を配信しております。内容は、家庭学習課題を解説するものを中心に、実験や実習を演じて見せるものもありました。また、運動不足を解消するために、保健体育科の教員が考案した体操を紹介するものや、お世話になるＡＬＴに特別出演してもらい、英語で紹介するもの、学校内に入ったことすら数えるほどしかない7年生のために、校長みずから学校案内をするものなど、教科や担当者により多岐にわたっていました。その他、学校再開後、ＮＰＯ法人ラーニングフォーオールのご協力をいただきながら、実際に学校で双方向型のオンライン授業の練習を行ったり、Ｗｅｂ会議アプリを使った個人面談なども行っています。

上の写真は、一度持ち帰らせたタブレットを土曜授業の日に持参させ、学校で教員が指導しながら、双方向型の授業を体験している様子です。下の写真は、Ｗｅｂ会議アプリを使用して離れた場所にいる担任と面談している様子です。またオンラインシステムの充実は、不登校対策でも大きな成果を上げています。この生徒は現在9年生ですが、7年生のときから不登校となり、8年生の間はほとんど登校できないか、たまに登校しても、別室で1、2時間自習をして帰っていました。それがこのように、別室にモニターを置き、教室の授業をリアルタイムで配信し、教室で使用しているプリント等も配付したところ、学習に取り組む姿勢ががらりと変わりました。のみならず、ほぼ毎日のように登校できるようになり、給食も食べて、午後の授業まで受けるようになりました。まだ実現できていませんが、「今度教室に行ってみようかな」、と口にするようにもなりました。

この写真は、上の写真で生徒がモニターで見ている授業です。教卓の手前にあるパソコンの

内蔵カメラと外付けの集音マイクで、授業の様子を配信しています。そのパソコンを教員側から見たところです。今後ハード環境が整い、生徒本人の了解が得られれば、このモニターに生徒の顔を映しだすことが可能になります。まさに双方向型の不登校支援が実現する訳です。さらに、現在はＰＣＲ検査を受けたり、近親にコロナ感染者がいたりして、出席停止や登校自粛扱いになっている生徒が複数おります。そうした生徒は、在宅で配信された学校の授業をリアルタイムに受けることができ、本人や保護者からもたいへん感謝されているところです。

さて、最後に、今後の課題を３点申し上げます。

まず１点は、セキュリティによる使いづらさです。現在９年生に貸与されているタブレットは、何回もログインしないと使えない状況です。また、ログインの度にダウンロードが要求されるアプリもあり、オンライン授業を想定した場合、生徒にとって使いづらいと思われます。さらにパソコン上にテキスト等が保存できないため、双方向性が極めてやりづらいといった欠点があります。

２点目は、有害サイトの閲覧制限についてです。現在の設定は、生徒や教員の使い勝手という点でのセキュリティが厳しい反面、有害サイトを閲覧できる場合があります。今後は、両者のバランスを考えた設定が必要になってくると思われます。

３点目は、ソフト・ハード両面での一層の行政支援です。まず、現在導入されているオンラインツールが、特に本校の目指す双方向型の学習支援システムではあまり役に立ちません。場合によっては副教材と同じように、保護者負担をお願いせざるをえないかもしれませんが、学校の実態に即したオンラインツールを使用したいと思っています。また、実際に双方向型のオンライン授業を行ってみて、例えば現在有線で行っているネットワーク環境が貧弱であること、授業の音声を拾う高性能マイク等が必要となること、動画編集ソフトが導入されていないため、教員が在宅勤務の中で動画を作成していること、また、学校のパソコンで動画を扱うと動作が重くなることなど、諸課題も明らかになってきています。

結びにたいへん恐縮ですが、本校の切実なお願いを申し上げます。つい先日、この９月中に小学校よりお借りしているタブレットの回収と、すべてのタブレットの設定をコロナ前に変更する旨の通知がありました。これにより、不登校や、コロナ対策も含め、先ほどご説明申し上げた本校の学習支援策を根本的に見直さざるをえなくなりました。このことによる本校生徒、保護者の落胆、また、教職員のモチベーションの低下が懸念されます。先ほど氣田さんがおっしゃいました、小学校のご事情があることは十分分かっております。また、他の中学校の実態も踏まえ、本校だけがわがままを申し上げることはできません。しかし、やる気のある中学校への何らかの救済措置について、ご検討いただければ幸甚です。どうぞよろしくお願い申し上げます。ご清聴ありがとうございました。

○坂本区長

現在のご説明につきまして、ご質問等ございましたらご発言願いたいと思います。

○松澤委員

はい。

○坂本区長

はい。松澤委員さん、どうぞお願いします。

○松澤委員

今、お二方からご説明いただきまして、現場の声が聞けて、非常に参考になりました。ありがとうございました。

このような状況の中で、やはり、すべての人が同じような思いで共通しているのではないかな、というように思っているのですけれども、やはりタブレットですとか、デジタル環境というものが整っていない現状というのが今あると思います。もしですね、整った状況になった場合ですね、やはり今おっしゃったように、改善点と、今すごく効果が出ている点というものがあると思いますけれども、私が後で話させていただく中にもあるのですけれども、一番懸念しているのは、先ほど武田校長先生がおっしゃっていたように、モチベーションの低下というものが一番の原因、心配な点でもあります。教員のモチベーションの低下、それによる子どもたちの勉強へのモチベーション低下。そんなところもあると思うのですけれども、コロナの現状が始まったのが3月の初めだと思いますが、そこから今現状を踏まえて、変わった点、そういったモチベーションに対して、自分たちが感じている点でよろしいので、ちょっとお聞かせ願えればというふうに思います。

○坂本区長

では、お二方から聞きましょうか。順番で氣田先生からお願いします。

○上板橋第四小　氣田校長　はい。タブレットが引き上げられるということで、先ほどちょっとお話しましたが、本校昨年度プログラミング教育の研究校ということでやらせていただきましたので、いよいよ去年やったその計画をもとに今年度から始めようというちょっと張り切っていたところだったんです。やはり、昨年経験している子ども達がいますので、でも、「今年はもうプログラミンはやれないんだよ。」、タブレットを使った、ものですね。そうじゃないプログラミング教育はもちろんやれるのですが、タブレットを活用したものはやれないということで、「去年何年生がやっていたあれはやれないの。」というような子ども達の声があったり、教員達もちょっと去年の研究を踏まえてやろうということで張り切っていたので、その辺のところはちょっとあれなんですが、ただ、でも、やはり最終学年の9年生を

ちゃんと尊重してあげて、そこに今行って有効活用されているということも共有をしまして、先程も言ったように、戻ってくるのをとにかく心待ちにしているところです。すいません、小学校の事情です。

○板橋第三中　武田校長

失礼いたします。モチベーションというご質問でございましたので、そこだけに絞って申し上げますと、本校の教員は、最初の臨時休業の段階で、本当に学びを止めないっていう、ただ一点、このスローガンのもとに、はっきり言うと、双方向型の授業も含めて「やろう！」ということで、本当に最初の臨時休業の段階で「位置について」、と位置につきました。それで2度目の臨時休業の時には、プロジェクトチームを発足させて「用意」という風にお尻を上げました。ところが、やはりそこは環境整えなければいけないので、教育支援センターの平沢所長はじめ、本当にいろんなことやってくださいました。本当に心から感謝しています。ですけれども、その環境を整える中で時間がかかってしまって、本当に「用意」の状態で、お尻をあげた状態で、ずっと「ドン！」がかかるのを待ち続けているっていうのは厳しかったです。でも、やっと教育支援センターの皆さんが頑張ってくださって、タブレットが配付され、夏休みいよいよ「ドン！」がかかった、「さあ、突っ走ろう。」で、本当に蓄えていた力を全部振り絞って走り出したら、100メーター競争かなと思っていたら、今10メーターか20メーター走ったら、やっぱり一旦中断ですよ、と。このレース中断ですよ、となっちゃったのが、正直本校の教員の思いです。はい。

ただ、先ほど申し上げたように本校だけがわがまま言うことできませんので、今は昨日職員会議をズームでやったんですけれども、そういう状況だけれども絶対に腐らないで、その中でも何かできる方策を見出していこう、というふうに叱咤激励しているところです。すいません、以上です。

○坂本区長

ありがとうございました。松澤委員さん、いいですか。

○松澤委員

ありがとうございました。参考にさせていただきます。ありがとうございます。

○坂本区長

はい。他の委員さん、いかがでしょうか。では、ご質問がないようでございますので、次に進みたいと思います。

それでは、本日のテーマでございます、「感染症対策を契機とするこれからの学校教育のあり方について」の協議に入りたいと存じます。

最初に、このテーマについて、まず私の方からでございますけれども、考え方を少し述べた

いと思いますので、よろしくお願いしたいと思います。

まず、国によりますと、新型コロナウイルス感染症の日本国内での感染者数は約6万4,000人。都内においては約2万人と報告をされております。また、専門家会議のアドバイザリーボードにおいては、感染が起きた場所の共通の条件は、「3密」と「大声」という場面でありまして、感染経路では「飛沫感染」、「接触感染」に加えて「マイクロ飛沫感染」が、最近になって世界的にも重要と認識をされているようであります。

飛沫感染のリスクを評価する場合には、換気状況はどうか、ソーシャルディスタンスがどの程度維持確保できるか。児童生徒が会話する場面や場所はどこかを確認すること、また、接触感染のリスク評価としましては、他の人と共有する物品や場所を特定すること、そして接触頻度を把握することが重要であると考えられております。

こうしたことを踏まえた感染防止対策としましては、先ほどのガイドラインの説明にもありましたが、一人ひとりが行う個人ごとの対策として、症状がある場合に登校しないことの徹底、登校時の検温、健康観察、手洗いやマスクの着用のほか、組織的な対策として、いわゆる3密を回避する環境設定や、行動様式のルール化などが考えられるところであります。

また、特に夏の季節など気温や湿度の高い環境においては、「熱中症対策」と「新しい生活様式」を両立させなければなりません。このような対策を始め、ウィズコロナとして、普段の生活の中でリスクを回避できる仕組みを徐々に作っていくことが求められておりまして、今がその転機にあると考えております。コロナ後も継続して、感染症予防ができる生活様式へシフトしていく必要があると思います。

それでは、具体的な対策について少しお話をさせていただきたいと思いますが、まず、衛生管理につきましては、設備面での対策、環境整備が必要だと思っております。給食調理室の空調設備、トイレの洋式化も財政状況を見極めながら進めていきたいと考えています。校内の清掃活動につきましては、効果や効率性の高い清掃用具を設置することや、作業手順の見直しなど、工夫の余地があるものと思います。清掃が教育活動としての側面もございまして、用具の大切さへの気づきや衛生概念を持つこと。清掃スタッフへの感謝の気持ちなど、子どもの意識を高める機会でもあると考えております。コロナ禍を改善の契機として、様々な工夫をしながら、よりよい学習環境につなげていければと考えています。

次に、学校でのＩＣＴの活用についても述べたいと思います。近年のスマートフォンの普及やビッグデータ、人工知能ＡＩの活用による技術革新など、社会が激しく変化をする中において、これからの子どもたちには変化に対応し、様々な課題に向き合い、解決する力が必要になると考えられております。こうした社会状況の変化を背景とする、新学習指導要領に基づきまして、プログラミング教育、外国語教育の充実、アクティブラーニングが導入されるなど、日

本の教育は、この歴史上大きな転換点にあると感じています。ＧＩＧＡスクール構想については、感染症の拡大を背景として、オンライン学習など、ＩＣＴの活用による学校休業中の学びの保障も視野に入れた早急な実現に向けて、大きく舵が切られました。本区におきましても、児童生徒向けの１人１台端末の配備や高速大容量通信ネットワークの構築を一体的に行い、Society5.0時代を生きる子ども達のために、ＩＣＴの先端技術による、教育活動の基盤整備を進めることにいたしました。

まもなく、タブレット端末を高速ＬＡＮ回線上で使用するためのアクセスポイントの増設とケーブルの敷設工事を開始いたします。タブレットは２月ないし３月には全校への配備が完了する予定であります。また使用する機種とＯＳ、ソフトウェアの選定につきましては、すでに終了しておりまして、近くクラウド使用のガイドライン、マニュアル等について、学校関係者、学識経験者などからなるワーキンググループを立ち上げて、検討を進めるとの報告を受けております。

誰一人取り残すことのない、個別最適化された、創造性を育てる教育の実現に向け、授業での活用だけではなく、休校時等のオンライン授業や、自宅等でのリモート学習、不登校児童生徒への学習支援や教員の働き方改革にも、リソースとして、大いに活用されることと期待をしております。私は学校でのＩＣＴを有効に活用するために、トラブル発生時には、すぐに対応できるテクニカルサポートによるバックアップやメンテナンスなど、横断的なリスクマネジメントが必要であると考えています。現在、教育委員会に教育ＩＣＴ推進係がございますが、外部の専門家や民間企業のタスクフォースなどの力を借りながら、円滑にＩＣＴ機器を利活用できる体制整備も大切ではないかと考えています。

一方において、こうした整備を整えたとしましても、芸術の分野、正解のない問題や感覚的なことなど、本物に触れる、体験するといったＩＣＴには頼れない領域もございます。ＩＣＴの活用による諸課題、課題解決能力や、創造力の育成と同時に、謙虚な心構えを持ちながら、感性豊かでバランス感覚に優れた人間を育成していくことが何よりも大切であると考えています。教育委員会に対しましては、手段としてのＩＣＴの特性をしっかりと理解をしながら、児童生徒が人として成長していくことにつなげていっていただきたいと考えております。

以上、私の方から時間を頂戴いたしまして、若干意見を述べさせていただきました。

教育委員の皆様には、この後、順次ご意見を頂戴したいと思っておりますが、よろしくお願いしたいと思います。

それでは、まず初めに、青木委員さんからお願いしたいと思いますがいかがでしょうか。

○青木委員

はい、承知しました。

私の方からは、今、区長もしくは氣田校長先生、武田校長先生からお話がありました、ＧＩＧＡスクール構想について、少し思うところをお話させていただきます。

まず初めに、武田校長先生のお話の中で、やはり小・中学校において、オンラインの授業というものを肯定的にとらえているという方が85%近くいるというお話がございました。やはりそういうものに対しての期待が大きいということだと受けとめられますけれども、一方、私の本務先の大学のところでは、全く逆のことが起こっています。これは、言うまでもなく、いわゆる３密を避けるということで、この首都圏の大学は、この４月から７月下旬といった前期の期間、完全に休業という形をとらざるをえない、というところとなりました。

それを踏まえて、私どもの大学でも、すべてがオンライン授業という形で、半期終わったところでは、逆に学生たちからは、実は大学に行きたかった、とか学校で授業を受けたかった、友達と一緒に授業を受けたかったという声が、逆のパーセンテージぐらい非常に大きくなっています。これはご父母からも同じ反応でございます。ということで、いわゆる後期というところでは、区長からお話があった体験、いわゆる実験や実習授業といったところでは、できるだけ３密を下げて、大学で授業をしようという動きになってきている状況でございます。そういうかたちで、ちょっと高等教育と初等中等とは違うという状況を踏まえてですね、前期でやってきたオンライン授業の中で少し感じたことをお話しさせていただきたいと思います。

ＧＩＧＡスクール構想の中では、三つのポイントという形で申し述べられていて、一つはハードウェアの整備です。先程来、両校長先生からお話があったとおり、タブレット等の整備がやはり必要というのは言うまでもございません。できる限り児童生徒に１人１台のタブレットなり、コンピューターを実現するというところが早急に望まれている、というものと同時に、やはり武田校長先生のお話の中にあった通信ネットワークの整備です。このインフラの整備というのが非常に重要でございまして、これは我々がやっていたオンライン授業の中でも、やはりご家庭の環境等によって、通信ネットワークの状況が厳しいといったようなところがあって、結局は学生に通信ネットワーク補助費などを、学校から支給するような形をとらざるをえなかったという状況がございます。これは非常に大事だというふうに考えています。また併せて、全国の自治体、学校含めてですけれども、効率的に効果的な、そういったものが調達、整備できるような支援が必要だというのが、ハードウェアの中で望まれていることになります。

これと両輪で必要なのが、やはりソフトウェア、あるいは先程来からお話がある指導体制、この２点だと思っています。特に、ソフトウェアの中では、大事になってきているのが、やはり個別学習、個別最適化の教育、氣田校長先生のお話があったものになると思います。例えば、ＧＩＧＡスクール構想の中で言われているものの中に、ＡＩドリルなどの先端技術を活用した実証というのを充実させていこうという話があります。これは個別の学習フローなど、その一

人ひとり、生徒指導に合わせた学習のフローというのものを、ＡＩが導き出して、最適な学習ドリルというものを提示する、いうような流れかと思うんですけれども、こういったものをある程度管理するというシステムが必要になりますし、これが個別最適化されていった先には、おそらく個人情報という問題が出てくるのでないかというふうに思っております。ですので、先ほどハードと併せてという話になってしまうかもしれないんですけれども、ソフトウェアの中でも統一認証といったような仕組みが必要になってくるかと思います。

先程武田校長先生のお話の中で、セキュリティによって何度もログイン作業が必要だった、という具体的なお話がございました。こういったものも統一認証の仕組み、具体的には、おそらくこれを統合型で考えるとすると、統合型校務支援システムという言葉になろうかと思います。これを策定して、個人情報の観点からある程度をセキュリティを保護しつつ、認証などは、ワンストップで行えるような、ラーニングマネジメントシステムといったようなものの整備が同時に必要になってくるのではないかというふうに思います。

あと、デジタル教材というところになります。私ども、私自身も大体半期で60コンテンツぐらいを作って、私どもの職場では、今5,000を超えたところですけど、1年間でおおよそ1万を超えるコンテンツが、おそらくオンラインででき上がるということで、このコロナ禍というのはそういったものを一気に推し進める機会となっているんだなというのを実感しているところでございますが、これは、やはり現場の教員の先生方の努力というのが非常に重要になってくるかと思います。当然ですが、教材開発の企業等を活用するところもあるかと思いますが、それは個別最適化という観点からは、その学校、クラスに合わせたようなものをやはり教員一人ひとりが考えていく必要があろうかと思いまして、この辺の開発の事例として、武田校長先生のお話があったかと思っておりますが、これに積極的に教員は取り組んでいく必要があろうかと思います。

また、これに対しての指導体制というのが非常に重要になってこようかと思います。先程、ラーニングマネジメントシステムといったような、管理するサーバー校務支援システムが必要だというお話をさせていただきましたが、これに関して、やはりそれを扱えるような教員の研修が必要かと思っています。この辺を、例えばｉＣＳを活用する、或いはＩＣＴの活用、教育アドバイザーといったようなもの、先ほど区長から若干お話がありましたが、こういった方たちが、例えば研修センターあるいはオンラインでもよろしいかと思いますけど、定期的にオンラインワークショップを開催していくというようなことが、同時に求められるかと思います。併せて、生徒児童さんには、クラスの中でＩＣＴを支援する支援員といったようなものが、やはり必要だというふうに言われておりまして、ＧＩＧＡスクール構想の中では、外部人材の活用ということが言われておりますが、ここは例えばの話ですけれども、社会人の方でももちろ

んよろしいかと思うんですけれども、例えば今授業でなかなか大学に来れていない大学生ですとか、場合によっては、高校生などが学びに近い世代という形で、空いている時間をうまく活用して、ＩＣＴの支援に来てもらう、特に大学生などで教員を目指している人などは、この辺を積極的に取り組んでくれるという形がとれるかと思いますので、この辺をうまくやれていければな、というふうに個人的には考えているところです。

検討課題の中で、最後に申し上げたいのは、一つ、この辺の個別最適化ができてくると、いよいよその先には、例えば学年を超えた学び、いわゆるトップアップ、あるいは逆にボトムアップ、下の学年ともう一回学習しなければいけないというようなことを、これはクラスの中ではやりづらいところはたくさんあろうかと思いますけれども、オンライン学習の中では当然こういったものを自由にできるというところがあろうかと思います。この学年を超えた学びというような形で、学びたい子は、小学生でも中学校のものを学べるようなところをどんどん伸ばしていくようなところも、ぜひＧＩＧＡスクールの中で検討していただければよいのかなというふうに思います。

雑駁ですが、以上私からの考えをお話させていただきました。ありがとうございます。

○坂本区長

ありがとうございました。ただいまの青木委員のご発言に関しまして、自由に意見交換をしたいと思いますけれども、ご意見のある方はどうぞ挙手願いたいと思います。いかがでしょうか。

また、次の委員さんに移りますけれども、関連事項がございましたらどうぞ。その時にですね、またご意見をいただきたいと思います。

次に松澤委員からお願いしたいと思いますがいかがでしょうか。

○松澤委員

今回、コロナウイルスの感染症において、このような事態になったことは非常に残念に思っております。そしてこういった大きな転換期において、やはり10年後の未来はきっと大きく変化するというふうに私は思っております。多分皆さんもそう感じているのではないかというふうに思っております。

私たちはその変化に対応できる、まちづくり、板橋区としてのまちづくりっていうものや、人材や子どもたちっていうものを育てて作っていかなければいけないのではないかなというふうに、今回のことで切に思っております。2000年以降、自分がずっと感じていたのは、古いものと新しいものの融合、調和というところで、時代が変わるとともに、先ほどもいろいろな方からご意見があったのですが、デジタル化が進んでいく。それはもう2000年以降、どんどん進んでいます。そういったことも含めて、私一人の力ではできないこともたくさんあるので

すけれども、これは必ずやらなければいけないということ、いろいろな人の力を借りながら、先ほどｉＣＳの話があったり、ＧＩＧＡスクールの話がありましたが、そういったものは必ずやっていかなければいけない課題であるのではないか、というふうに思っております。

私は、板橋区民としてでもあり、教育委員会の委員として、そして一保護者の立場として、今日は少しお話したいなというふうに思っております。

私が考えているのはやはりこういったことになって、世の中がなっている時ほど、小さなことの積み重ね、一つの動画を作ったことから、先ほども武田校長からもあったのですけれども、一つのスタートを切る、その一歩の積み重ね、それが例え報われなかったとしてもそれをやったことが、もし次に繋がらなかったとしても、それを必ず諦めないでやっていただきたいなというふうに思いますし、やっていかなければいけない。それで、そうしなければ、大きなことっていうのは、絶対できない。最も小さいこと、それを積み重ねていくことが、一番の最大の成果を生むのではないかなというふうに思っています。そしてそれが一番大切なのではないかなというふうに思っております。

私は、このコロナウイルスの感染拡大に伴う緊急事態宣言の後、私事ではありますけれども、１日も休むことなく、数千数万のお花、植物に水を毎日やって育てていたのですけれども、それが私の仕事ですから、それはもう当たり前の日常ということです。その時に、学校を見たときにですね、ある学校の校長先生が言ったのですが、日常が壊れてしまうと。学校がなくなる、学校が休みになるということが、本当に日常がなくなっていく、そしてその日常が仕事であるクラスや子どもたちと向き合っていた先生、というものであるならば、心が傷んでいたのではないかなというふうに思っています。

だからこそ、先ほど武田先生と氣田先生にも、先生方のモチベーションについてちょっとお聞きしたのですが、そういったことをいつも思って、私も過ごしてきました。

今、一番大切なことは、子どもたちの成長を、先程も何度も言っておりますが、成長、学びを止めてはいけない、ということ、育てることということに休みがないのです。私は１日も休まず、お水をやったと言いましたけれども、先生方も子どもたちも毎日毎日成長しております。でも、その成長を決して止めることはできない。そして、それが育てることに休みがないというふうに私は思っていて、休みの間、学校が休みの間、例えば家庭がその成長を止めることなく、そして、より困難に立ち迎えるように、心の根っこを伸ばせる環境を家庭が作っていただけたなら、全く心配はないと思っております。しかし、それが難しいご家庭があったら、今から、それを取り戻さなければいけないというふうに思っておりまして、それは、決して急いではいけない。

先ほど武田先生がおっしゃった、好転した結果、今まで来れなかった人が来れるということ

もあると思います。しかし逆に今まで元気に来ていた子が、来れなくなるということも必ずあるというふうに私は思っています。そういう時こそ、ゆっくりとゆっくりと成長、そしてその日常を、育てていくことをお願いしたいなというふうに思っております。今おかれてる環境が、逆境であればあるほど、私はそういったピンチをチャンスに思えるようなモチベーションを持っていただくことが一番大切なんじゃないかなというふうに思っております。

それは、いつも区長さんもおっしゃっているように、板橋区はこういうふうにしていくのだというビジョンや未来がどうなっていくか、その希望の光を見せていくこと。それをできるかできないか分からなくて、今立ち止まったとしても、それを少しずつでも、必ず進めていくことが大事なのではないかなというふうに思っております。そこには、ではどうやったら進んでいけるのか、どうやったら希望が持てるのかっていうところに、一番大事なのはやはり、安心と安全な環境が大切。何度も何度もおっしゃっておりましたが、感染防止の、今日も説明にもあったと思うのですけれど、そこをまず第一に守っていき、そして皆さんが日常に戻っていけるような体制をつくった上で、未来のビジョンを見せていく、ということが大事なんじゃないかなというふうに、思っています。そのことを踏まえてですね、やはり今大切なのは、優先順位を的確に選定していって、そしてどれからやるのか、一歩ずつ、それを一歩ずつ進めていく、という、先ほど武田先生もおっしゃっていましたが、準備が大事なのではないか。今やる、今やれることはやっていいと思いますが、やれないこともたくさんあるので、その準備を進めていくことが私は大切なのではないかというふうに思っております。

そして、これはすごく難しいこととは思いますけれども、子どもたちの気持ちや環境を変えていく。保護者や地域、そして区民の皆さんのそういう思い、気持ちを少しずついい方向に変えていく。ということを、やっていくことによって環境を少しずついい方向に進めていけるのではないかというふうに思っています。そのためにはですね、やはりここにいる板橋区の職員の皆さんや、先生方、そして学校関係者の皆さん方の気持ちを少しでも前に進めていくことが、最も大切なのではないかと思っております。そういったことをどうしたらできるか、どうしたらやっていけるかっていうことは皆さんの知恵を一つずつ集めながら進めていって、やはり、この後ですね、教育委員の先生方のお話もあるのですけれども、働き方、学校の校長先生方も先ほどおっしゃってましたけど、先生方の働き方を少し見直さなければ、氣田校長がいいことを言っていましたよね。学校行事を変えていこう、学校の、例えばですけど、中学校と小学校で一緒にできる行事はないか。そういうことも見直していって、それもｉＣＳでお話し合いをしていろんないい意見、そして、子どもたちの意見もいい意見が出れば、それを採用していただくと良いと思います。そしてそれが決まった状態で、地域のご意見もこの後あると思うのですけれども、地域の皆さんにそういうことをお手伝いいただく。先ほどのＩＣＴに強い方がい

れば、ＩＣＴの支援をしていただける方にピンポイントでお話を聞いたり、そういったことをご協力いただくということは、非常によいのではないかと思っております。

私は、本当に教育の専門家でもありませんし、教育についてそこまで詳しく分かる人間ではありませんが、ただ一つ、今回のことで、このコロナの状況下で思ったのは、やはり気持ちは必ず落ち込んでいます。誰でも落ち込んでしまいます。このあと不透明な世の中で、それではどうやったら自分の気持ちを前向きにしていけるのか、というふうに思っています。そういう親御さんや大人の方がたくさん多い環境の中で、子どもたちはもっとそう思っていると、私は思っているので、まず大人や先生方や子どもたちの先頭を行く方々が、そういう未来について、少しでも、前向きに考えていけるように私は願っていきたいなというふうに思っていますので、よろしくお願いいたします。

ありがとうございました。

○坂本区長

はい。どうもありがとうございました。

ただいまの松澤委員のご発言に関連しまして、ご意見のある方はどうぞお願いしたいと思いますがいかがでしょうか。

では特にないようでございますので、次は、長沼委員さんから、お願いいたします。

○長沼委員

はい。長沼でございます。よろしくお願いいたします。

学校が休校になりまして、わかったことがあります。それは学校がいかに価値のある組織なのかということ、そして、それとは逆に見えなかった課題も見えてきたということです。学校の価値、あるいは意義ということで言えば、子どもたちにとって見ると、学校に行きたい、友達と会いたい、一緒に部活ができない、苦しい、何とか早く勉強がしたい、友達と遊びたい、という声がたくさん聞こえてきました。学校というのは、改めてそういう場であったということを実感しました。

保護者の立場からすると、学校に子どもたちが通っているからこそ、安心して働くことができていたのだなと実感しました。そして、この後、おそらく高野委員がお話しされるかと思いますが、地域の皆さんが、コロナウイルスによってｉＣＳ活動を制限されて、学校ボランティアをなかなかしにくくなってしまった。私たちは学校に関わってお手伝いすることで、ある種、生きがいを感じていたのだ、それを奪われてしまったのだ、というように、児童生徒そして保護者、地域の皆さんから見ても、大きな打撃を被ったわけです。そして、そのことで改めて学校の価値というものを感じたわけですね。

逆に課題もありました。学校行事の話もありましたけれども、あるいは部活動の話もこの後

しますが、知らないうちに、大事だから大切だからということで、肥大化してきてしまった部分があります。それがなくなってみたら、でも、これでできるのではないかというふうに思った面もあったわけです。そう考えますと、ひょっとすると、これまで明治時代からやってきた学校教育のあり方の中で、前例踏襲でやってきたけれども、変えられることがあるのではないかということに、気づかされた休校期間になっていたように思います。

ということを前提に、教育学者として、あるいは元学校教員としての立場から3点申し上げます。

1点目が、先程、氣田校長もおっしゃっていましたが、学校というところが集団での活動をする場であること。教科の学習もしかり、特別活動もしかり総合学習、道徳、あるいは中学校であれば部活動もしかり、学び合う場なのだということです。改めて、このコロナ禍、ウィズコロナの時代にあっても、3密を避けるのは当たり前ですけれども、できる範囲で、これまでどおりの学び合いというのも保障していくということが大事だと思います。

お2人の校長先生から、とてもいいヒントをいただいたなと思うのですが、ある意味この事態というのは、大人たちも経験したことのない、初めての事態です。一生懸命大人たちも考えて、アイデアを振り絞って、改革していこうとしていますが、ひょっとすると子どもたちのアイデアを活かせば、いいものができるかもしれないのですね。大人たちが考えるコロナ対策が正解とは限らないかもしれません。初めて遭遇した事態ですから。そう考えると、先ほどのお話のように、行事も子どもたちの声を活かして変えていこう、こういうことが、これからのウィズコロナの学校教育があっていいのではないかと実感しました。

2点目は、学校の働き方改革に関することです。昨年のこの場でも申し上げましたが、文科省のデータで、過労死ラインを突破している教員が小学校で約3割、中学校で約6割いる、という状況です。いよいよ今年度は、これを何とかしていこうという矢先に、コロナが襲って来てしまいました。先ほどのお話のとおり、先生方の仕事は残念ながら、増えています。ひょっとすると倒れそうな先生がいらっしゃるかもしれません。今日の新聞記事を読んで、お隣の区の熱中症対策で気づいてみたら自分が口にしたのは給食のときの牛乳だけだった。しかも他は食べていない。牛乳しか飲んでいない。配膳しなきゃいけないから。そういう事態の中で、板橋区の先生方は本当に頑張っていただいていると思います。そういうことを当たり前のように先生方はやってくださっているかもしれません。今までの仕事プラス消毒のこと、手洗いのこと、密にならないようにする、業務の見直し、アクティブラーニングができないけれども対話的授業が何とかできないだろうかということで考えていらっしゃる。先ほどの武田先生のように、オンラインの授業のコンテンツも作らなきゃいけない、本当によく頑張っていらっしゃると思うのです。こういう中で昨年申し上げましたが、引き続き外部人材を登用していただいて、

スクールサポートスタッフですとか、部活動指導員を増やしていただいて、もちろん予算的な手当が必要なのは重々わかっておりますが、学校の先生のために、働き方改革に資するようなことを教育委員会としても考えていきたいというのが2点目です。

最後、3点目ですが、これは働き方改革とも関わるのですが、一昨日、文科省が令和5年度から、学校の先生方の働き方改革のため、休日の部活動を地域移行するということを発表しました。これは昨年の秋から、文科省のナンバースリーである政務官がトップになってタスクフォースを立ち上げて、そこで議論をしてきた一つの成果なのですけれども、私も文化庁の文化部活動ガイドラインの策定の座長をしておりましたので、ヒアリングに呼ばれて先月、政務官とお話をして参りました。

その席で申し上げたのは、働き方改革で地域移行するのはもちろん大事なのだけれども、地域に受け皿がなければ、なかなかうまく移行はできない。そこを考えて文科省はやらなければいけないのではないか、ということを述べて参りました。おそらく3年間かけて、全国的に地域移行、まずは休日の部分だけでも、やっていこうということになった場合に、ぜひ板橋モデルというのを策定して、教育委員会として、もちろん地域の皆さんと協力しないとできませんが、やっていく道を探っていく必要があります。文科省の案を見ますと、やりたい先生もできる仕組みになっています。私もかつて中学校教員時代に熱心に部活動指導をしていましたが、やりたい先生は休日に地域の方で契約をして指導する。つまり兼業の仕組みが必要ですけれども、教育委員会として。そういう仕組みを作った上で、実践することも可能になっていますから、それを3年間かけて進める必要があります。そうなると教育委員会としては、社会教育の部分にウエイトがかかってきます。指導者の質の担保が大事ですので、それをする仕組みを作らなければいけません。

ということで、ウィズコロナの時代の学校教育は地域の皆さんに、ぜひたくさん関わっていただきたいので、ｉＣＳが非常に大事になります。そういう仕組みを生かして、部活だけではないと思いますけれども、先ほども2人の先生方からお話がありましたとおり、学校と地域とが一体となってそれから松澤委員がおっしゃったように保護者の皆さんと一体となって先生方を支えていい教育ができる仕組みをつくる必要がある、こんなふうに思いました。

最後に一言だけ申し上げますが、今日武田先生は、ＩＣＴの話を中心にされていましたが、毎月の校長通信を、私は楽しみに読ませていただいています。その中でこんなフレーズがありました。自粛、自粛で中学生の皆さんは様々なことを自粛しているかもしれないけれど、君たちの夢だけは自粛するな。何とすばらしいと思いました。感動しました。こういう校長先生方が率いていただいている板橋の学校は必ずいい方向に向いていきますので、これからも教育委員会として支援していきたいと思っています。

以上です。

○坂本区長

はい。ありがとうございました。ただいま、長沼委員からお話がございましたけれども、ご質問等、いかがですか。

はい、高野委員さんどうぞ。

○高野委員

長沼先生の話の中に、地域の子どものために、今何もできないで困っているというお話があったんですけど、私も周りの方にちょっと話を聞いてみました。

今まで例年ですと、夏はおまつりとか盆踊り、それとか青健の野外キャンプとかいろいろなことで、皆さん子どもたちのために、地域の方も、活動ができていたんですが、今、何もできずに、何ができるかっていうことを集まって話し合っている状態です。私も板橋区全部の方に伺うことができずに、自分の周りの方にだけしか聞けなかったんですけれども、まず一つ、常盤台青健では、漢字検定、数学検定、それから英語検定を、地域センターを利用してやる、ということを決めたそうです。やはり野外で子どもたちと活動するという、集まって活動するということができないので、何か子どもたちのためにできること、学習支援という目的で、そういった検定を今年から始めるというお話を伺いました。

あともう一つ、中台地区では、中台千羽鶴プロジェクトというものをやるそうです。子どもたちが自由に活動できない中、室内でも活動としてできるような、日本の伝統文化である、折り紙を取り上げて、子どもたちに一人一羽ずつ折ってもらって、四つの学校で、中台青健の中の四つの学校で集めて、その千羽鶴を10月ごろに、地域センターに飾って作品展の中で皆さんに見ていただくというような活動をするそうです。

きっと私の知らないところで、それぞれの地区で皆様の知恵を絞って、子どもたちのために何かをしようというふうに考えて、これからそういうことが耳に入ってくるのかなと思いました。

○坂本区長

はい。ありがとうございます。他にいかがでしょうか。はい。

それでは、次に高野委員の方からご発言を願いたいと思いますが、お願いします。

○高野委員

先ほど、上四小の氣田先生、それから板橋三中の武田先生、お二人の校長先生のお話から、3月の突然の臨時休業から6月の学校再開、そして現在の学校の様子を詳しく知ることができました。学校休業中は私自身も何もできなくて、何ができるのかを考えながら、この二つの学校をはじめとして、様々な学校のホームページを閲覧していました。

その中で、校長先生から児童生徒への呼びかけや、また先生方が協力して、向原小学校では「待っているよ」、また板橋三中では、「ステイホーム」、のメッセージボードを先生方が作って、その様子をまたホームページの中であげ、それを校舎の窓いっぱいに掲げている。子どもたちに、そういうボードから発信している。

また、あとは新入生に向けて、校長先生、先ほど武田先生からもお話がありましたけれども、校舎の中を校長先生が案内する学校探検や、また、ある学校では制服、初めて7年生になる子たちがネクタイを締める、そのネクタイの締め方を動画で教えたり、また校歌を紹介するなど、学校に行くことができずに、先生や友達にも会えない不安な気持ちでいっぱいの子どもたちにとって、学校との繋がりを感じさせることができる動画がいっぱいあがっていました。また、その後、授業の動画など学習支援の動画もどんどん配信されるようになりましたが、ほかにも、先ほど紹介のあった板三中「ビートイットラジオ体操」を始め、各校の先生方が実演をするストレッチや筋トレなど、家庭でできる運動の紹介、また給食の人気レシピの紹介などありました。また、新河岸小学校では、学校再開に向けた準備の様子を毎日配信していました。校長先生と副校長先生が二人の掛け合いで、クイズを出したり、いろいろ工夫をして配信をしていました。先生がみんなを待っているという気持ちが、子どもたちに伝わっているのだろうと思いました。これらの取り組みから、休校中の児童生徒のためになるなら、やれることは全てやるっていう先生方の決意や努力が伝わって参りました。

今日の会議に向けて、改めて各校のホームページや学校だよりを見直したんですけれども、学校ホームページや、学校だよりで、学校の「今」を発信することの大切さを改めて強く感じました。またそれと同時に、配信された学校ホームページ、これは、その当時の大変貴重な資料として、記録として残っていくのではないかなと思いました。

6月の学校再開後も、全校で集まっての朝会や集会ができないので、様々な工夫が凝らされています。ある小学校では、毎年クラスでお店を出し、1年生から6年生がお店を回る、子ども祭りができなくなって、そのかわりに、全クラスが30秒間のクラス紹介動画を作ることにしたそうです。大声は出せない、密にはなれない、でも全員映りたい、と、どうやってメッセージを伝えようか、担任の先生と一緒に取り組んだそうです。

また、板橋第十小学校では、例年は全校が体育館に集まって願い事を発表し合う七夕集会を、今年度は願い事を廊下に掲示し、クラス代表が発表し、それをビデオに撮って、朝の時間に各学級で視聴することにしたということです。他にもリモート生徒総会や進路説明会、9月19日に板三中では、小学校6年生の保護者に向けて、学校説明会をライブ配信する予定だそうです。ホームページ上には、その視聴の方法が出ていましたけれども、これは小中一貫でも利用できる、そういった可能性を感じることができました。

このように、できないことをやり方を工夫し、できるように変えていくために、ＩＣＴを効果的に使っている例をたくさん見ることができました。今後も先生方の努力とチームワークで、可能性をどんどん広げていっていただきたいと思います。

また、上四小氣田校長先生の先ほどの発表の中でありました、板橋区コミュニティスクールについてです。昨年度まで順調に準備が進み、令和２年度からいよいよ本格的にスタートということでしたが、4、5月は活動を休止せざるをえず、第１回は書面やウェブによる開催になってしまいました。6月から各校で本格的に活動が始まり、様々な取り組みが行われているようです。

新河岸小学校では、7月のＣＳ会議で感染防止のために、地域や保護者ができることをテーマに熟議したところ、ＣＳ委員の呼びかけで、地元の複数の企業から大量の消毒用アルコールを寄付していただいたそうです。他にも、ＣＳ会議で消毒用アルコールが不足している状況をお伝えしたところ、それぞれ委員が自分の所属している同窓会とか町会、ＰＴＡなどに持ち帰ってすぐに対応してくれたというところも、複数ありました。

また、前野小学校では、6月のＣＳ会議で、学びの保障として、放課後学習教室を地域の方々の力を借りて立ち上げていく、ということを熟議したところ、7月からＣＳ委員と学力向上専門員に加えて、近隣に住む教員志望の大学生や、町会を通して連絡いただいた元教員のボランティアによる、放課後学習教室がスタートしたそうです。昨日ちょっとお電話でお話を伺ったんですが、2学期も昨日から始まって、嬉しいことにボランティアが増えている。子どもたちも楽しみに待っているということで、今後がすごく楽しみだと副校長先生がおっしゃっていました。

また、今年度周年を迎える学校では、熟議の結果、今までの周年行事とは形を変えた、在校生を中心に据えた新しいやり方として、上板橋第二小学校では、児童を中心に集会を実施し、記念誌・記念品を今年度中に作成する。また、高島第三中学校では、来年度に延期せず、今年度中に、学校の歴史を全校生徒で振り返る機会を設け、記念誌は来年度に完成させて、卒業してしまう現在の9年生にも配ることを検討している、などと学校だよりに出ていました。

こういった学校だけでは決められないこと、それをＣＳ会議で地域や保護者の代表の方など、ＣＳ委員と熟議して決めることができたのだというふうに思います。今まで当たり前だと思っていた学校生活は当たり前でなくなり、子どもたちのためにどうしていくことが、今必要なのか、学校の役割を改めて考える中、学校が取り組んでいること、学校が困っていること、心配していることなど、学校の今の姿を発信し、先生方だけでなく、保護者や地域の皆さんと一緒に考え、話し合うことのできる板橋区コミュニティスクールが今こそとても大切だと感じました。

また、各校での活動の様子を伺った中で、どなたにＣＳ委員になっていただくかということが、とても重要なポイントだと感じました。先ほどお話した例でも、地元の企業の方が、同じ同業の方たちにお話をしていただいたり、また地域の学識経験者の方が、自分の周りの学生さんに声をかけていただくなど、ｉＣＳの可能性がさらに広がっていました。板橋第三中学校では、今年度実際にオンライン授業をされた高校の校長先生に、ＣＳ委員になっていただき、双方向型オンライン授業の成果と課題について、実体験に基づく提案をいただき、ＣＳ委員会で熟議し、実効性ある取り組みを進めていくそうです。

今回いろいろな学校にお話を伺ったところ、ＣＳ委員会で学校の現状や困っていることをお話したところ、すぐに行動していただき、ＣＳ委員の温かい言葉や地域の皆さんからの、今できることの気持ちに感謝している、困難なときにあって、これぞｉＣＳ、とコミュニティスクールのすばらしさや意味を実感している、と、先生方からお話を伺いました。こうした取り組みや熟議を積み重ねていくことで、学校と地域、また保護者の信頼関係を築き、ｉＣＳの可能性が広がっていくことを期待しています。

○坂本区長

ありがとうございました。

ただいまの高野委員のお話の中で、何かご質問等ございましたらいかがでしょうか。よろしいですか。

ちょっとお時間の方が短くなってしまう、ちょっとだけ少しオーバーしますけれども、続いて、中川教育長の方からお願いいたします。

○中川教育長

はい。ありがとうございます。

今いろいろご意見を伺いました。

私の方からは、３月から５月まで、先ほど長沼委員のお話にもあったように、当たり前のように存在していた学校に通えない状況が続いた中で、やはり子どもたちや各家庭の日常において、学校がどれだけ大きな存在であったのかということが、改めて浮き彫りになりました。

友達に会いたい、勉強が遅れることが不安、といった子どもたちの声が、日本中に溢れていました。また家庭の社会経済文化的背景に格差がある中、子どもたちの学力格差が拡大するのではないか、という指摘や、家庭における児童虐待の増加に関する懸念もありました。学校という子どもの居場所がないことで、多くの保護者が就労面の課題を抱えるとともに、子育てに関する負荷が増大し、大きなストレスを抱えるようになったという指摘もございます。こうした学校の臨時休業に伴う問題が生じたことによって、学校は学習機会と学力を保障するという役割のみならず、全人的な発達、成長を保障する役割、あるいは人と安心安全に繋がることが

できる居場所、セーフティネットとしての身体的精神的な健康を保障するという福祉的な役割、いわゆる教育福祉という役割を担っていることが再認識されました。このことは、日本型学校教育の強みであり、学校教育のますますの充実の必要性を訴えているように思っています。

さて、私の方はちょっと広いとらえ方で、子どもたちが活躍するこれからの20年後の話を考えてみたいと思っています。人工知能、ビッグデータ、ＩＯＴ、ロボティクス等の先端技術が高度化して、あらゆる産業や社会生活に取り入れられる、Society5.0の時代が到来しつつあって、社会のあり方そのものが、現在とは非連続といえるほど劇的に変わる社会となると言われています。今回の新型ウイルス感染症の世界的な感染拡大が、その指摘を現実のものとしているように思っています。こういう社会に活躍する子どもたちにどんな力をつけていくのかということで、今日は3点お話させていただきます。

一つは、子どもが活躍する社会を見据えた教育のキーワードとして、３Ｓ、１Ｇを挙げたいと思います。これからの学校教育の目指す方向性を示す、今申し上げましたSociety5.0、このSociety5.0の中で、何か特別な特殊な能力を育てるのではなくて、やはり必要なものは、特に文書や情報を正確に読み取り対話する力、というところ、これは今、板橋区として最も力を入れている読み解く力、こういったことが必要だということを明らかに訴えています。

また２つ目は、学習内容、教科に枠にとらわれない、正解のない問いともいえる学習内容としてのＳＤＧｓ、これはもう坂本区長がリーダーシップを発揮して、板橋区としての非常に大きな施策として取り組んでいるところでございます。そして三つ目は、学び方としての「ＳＴＥＡＭ」、これについては、各教科、縦割りの教科というような枠組みではなく、実社会の問題発見、解決に活かしていくための教科横断的な学習、というようなとらえ方、そして学習道具としてのＧＩＧＡスクール構想ということで、ただこのＧＩＧＡスクール構想については、導入とともに学校のあり方や文化を見直すものになっていくのではないかというふうに思っています。

二つ目は、今年度から、新しい学習指導要領が実は始まっているのですが、どうもＧＩＧＡスクールで、何かそれがうやむやになっている気がしています。しかし、実はここで注目すべきは、幼稚園と小学校中学校高校を通じて育成する三つの資質能力が初めて示されています。この三つを総合的にバランスよく育んで、子どもたち一人ひとりに生きる力をつけていくことがねらいです。この三つの資質、能力で私が注目するのは、「未知の状況にも対応できる思考力、判断力、表現力」という文言です。現在の新型コロナへの対応は、まさに未知の状況への対応です。そして今後、世界の大きな動きの中で真正面から対応しなければならないのが、ＳＤＧｓに掲げられている17の持続可能な開発目標であり、それらの目標を達成しなければならない。今後、こういった未知の状況にも対応可能とするために、子どもたちに身につけて欲

しい力、これをちょっと首都圏模試センターが作成している思考コードを引用して、具体的なレベルで見ていきたいと思っています。

実は、この思考コードは、横軸に思考レベル、縦軸に難易度が表れています。まずは暗記再生型の知識理解事項、例えば、この人物の名前を考えなさい、答えなさい、よく私たちが小さい頃から受けたような問題ですけれども、このレベル、次は論理的思考を問うレベルで、得た知識を論理的に組み合わせることができるかが問われる。例えばザビエルが日本に来た目的は何ですか。50字以内で書きなさい。そして、これから問われていくのが、次の創造的思考を問うレベルの取り組みではないか、と私は思っています。「もしあなたがザビエルの布教活動をサポートするとしたら、ザビエルに対してどのようなサポートをしますか、200字以内で答えなさい。」すなわち、自分の考えを問われる、正解のない問い、そのものに、様々な知識や経験を活用しながら、自分にしかできない回答を創造する力、こういったものを板橋区としては、小中学校の授業において、発達段階に応じて、是非ともこの創造的思考を問うレベルの進化発展につなげることが必要であると考えています。

そして三つ目は、今後、コロナウイルスの感染拡大が終息するまでの間に、義務教育を受けた子どもたちを指す「コロナ世代」という言葉ができることが考えられます。かつて、「ゆとり世代」と言うように、学力不足と揶揄される言葉になってしまうのか、それとも評価される言葉として使われることになるのかは、学校の教育活動、そしてそれをリードする教育委員会の施策の方向にかかっていると思っています。もし今後、「コロナ世代」という言葉ができるのだとしたら、私は、「困難な環境に立ち向かい、克服する力がある世代」、という評価を表す言葉として使われればよいと考えています。

長い人生の中で、誰にでも一時的に遅れをとることがあります。しかし大事になるのは、その事実を受け入れて、いかに一歩一歩焦ることなく進んでいくかです。現在子どもたちや先生方にとっては大変厳しい状況であることは確かです。だからこそ、子どもたちに困難な環境に立ち向かっていく力を養うための経験をさせる、またとない機会でもあると思います。1年後あるいは数年後に、この困難を乗り越えた時、乗り越えたという達成感、成功体験が子どもたちの生きる力となり、自己肯定感をしっかり持った世代となるはずです。先程来お話があるような、つまり子どもたちの発想を活かしたイベントあるいは取り組み、そういったものを行っていく、そういうことが困難な環境に立ち向かい克服する力をつけることになるのではないかと考えます。

そのためにも、この時期だからこそ、学校も教育委員会も子どもたちや保護者、地域の方々を巻き込んで次世代の学校づくりに取り組むことが喫緊の課題です。これまでの学校に戻る、あるいは戻すのではなく、子どもたちが持続可能な社会の創り手となるために、現在置かれて

いる危機的な状況の中でも、持続可能な学校づくりを、学校に関係するすべての方々の思いと願いを組み入れて取り組んでいく絶好の機会であると思っています。これまでの学校では、あるいはこれまでの先生方の働き方では、到底持続可能な学校は成り立ちません。例年どおりの学校行事を中止する、宿泊行事も中止する、部活動は１時間を最大とするなど、様々な制約がある今だからこそ、学校教育でこれまで当たり前に行われてきたものを一度思い切ってストップしてみるのも、子どもたちのためはもちろんですが、教師の働き方改革の目線からも思い切って見直していきたいと思っています。それができるのは、現在のコロナ禍という状況だからこそ、というふうに思っています。

また、今年度末までには全児童生徒に１人１台のタブレットパソコンが配備され、学校教育のコアである授業革新を、より一層推進することが求められます。先程来お話が出ているように、現場の先生方や子どもたちが意欲的に取り組み、成果を自覚できるような、仕組みづくり、そして区長のご発言にもあったように、学校が使いやすい環境づくりに教育委員会として努めなければならないと考えます。

このＧＩＧＡスクール構想は、日本の未来を担う国策であるとの使命感と、板橋区としてのデジタルトランスフォーメーション推進の起爆剤としての役割を担う、との認識を教育委員会事務局はもとより、区長部局の皆様、そして校長先生を始め、学校関係者と共有していきたいと思います。

本日、区立小中学校校長会の役員の皆様にもご出席いただいておりますので、改めて校長先生方にはリーダーシップを発揮していただき、子どもたちはもちろん、先生方にも、この困難な環境の中において、自分たちの力で、学校を変えられるという達成感、そして協働意識を高め、見事なコロナ世代を築き上げていただきたいと願います。

そのためのキーワードは、試行錯誤です。現状のような、何が正解なのかわからない状況の中では、できる範囲で最大限の試行錯誤をして、どんどん打てる手を打ち、考えられるアイデアを現実化するよう、教育委員会が後押ししていく旨を、学校にはすでに伝えております。ぜひ、試行錯誤、様々なことに、とにかくトライしていこう、という、そこが、板橋区の教育委員会の大きな、今の合言葉になるのではないか、というふうに思っています。

結びに、ダーウィンが、「種の起源で、生き残る種とは最も強いものではない。最も知的なものでもない。それは変化に対応できるものである。」と述べています。「教育の板橋イノベーション 2020」の実現に向けて変化、進化する教育委員会、そして学校現場でありたいと存じます。

私からは以上です。

○坂本区長

はい。ありがとうございました。

ただいまの中川教育長からのご発言に対しまして、ご意見がある方はどうぞお願いいたします。

だいぶお時間もオーバーしてしまいました。

まだまだ、委員の皆さんから発言をいただきたいところですけども、お時間の関係で、今日はこの程度で、終わりにしたいと思います。誠にありがとうございました。

改めまして、長時間ありがとうございました。

本日、皆様と共有いたしました課題等につきましては、教育施策を始め、板橋区全体としてどんな施策ができるのかを検討して参りたい、とこのように考えています。また感染症につきましては、長期的な対応が見込まれるところでありますけれども、今後とも、区長部局、並びに教育委員会が、より綿密に連携、協力しながら、協働しながら着実に教育施策を推進することにより、児童生徒の教育を受ける権利を保障していくための学校運営を続け、これからの日本、板橋区の発展を担う人材の持続的な育成を行っていきたいと考えています。

今日この会場にお越しの教育委員の皆様、また他に今日ここにいらっしゃいます、すべての皆様に申し上げますけれども、より一層のご理解を賜りますようにお願い申し上げたいと思います。お時間もだいぶオーバーしてしまいました。たいへん失礼いたしました。

本日は、たいへんお忙しいところお集まりいただきまして、感謝申し上げます。これをもちまして、令和２年度板橋区教育総合教育会議を閉会といたします。

皆様本当にありがとうございました。